

学部だより

2025年 春 (No.32)



旧制新潟高校の学生と萬代橋／1934～1937年（新潟大学 にいがた地域映像アーカイブ・データベースより）
本資料を含むにいがた地域映像アーカイブ・データベースの新資料を、展覧会「人びとの姿から見る『にいがた』」（新潟大学駅南キャンパスときめいと多目的スペース、2024年3月1日～14日）で紹介しました。

目次

学部長ご挨拶（松井 克浩）	2
認知心理学的クラウドファンディング顛末記（新美 亮輔）	3
奥会津発・地域デジタルアーカイブの挑戦 人文学部と只見川電源流域振興協議会の連携協定締結に寄せて（榎本 千賀子）	4
NHK ラジオ『まいにちフランス語応用編』を担当して（逸見 龍生）	5
第39回俳人協会評論新人賞受賞『新潟医科大学の俳人教授たち』（中本 真人）	5
人文学部に新しく来られた方々	6
人文学部を去られる方々	7～8
2024年度人文学部 主なトピックス	8

学部長ご挨拶

人文学部長 松井 克浩



つい先日、新聞を読んでいたら「いま大学で学んでみたい学問は？」という特集記事がありました。学問分野のリストから読者に選択してもらい、その結果を集計して順位づけしたものです（「朝日新聞」2025年3月8日付）。ちなみにベストテンは、次の通りでした。①歴史学・地理学（圧倒的1位!）、②語学、③心理学、④文学、⑤芸術学、⑥哲学、⑦経済学・経営学、⑧法律学、⑨社会学、⑩医学（以下、農学、地学、生物学…と続きます）。分野の分け方が微妙な感じではありますが、ベストテンのうち9位までが文系で、そのうち7つが人文学部で学べる分野でした（少々驚きました）。

このアンケートは、朝日新聞の別刷りである「be」のモニターが回答しているもので、世論調査のような統計的な意味はありません。データの偏りや限界をふまえながらですが、これをもとにいろいろ想像し、考えることはできそうです。新聞紙面のモニター登録をするような人は、比較的熱心な読者であり、残念ながら若い人はそう多くなく、学校を出てからそれなりの年数を経た人が大部分と思われます。高校や大学などを卒業して、さまざまな仕事に携わり、生活上の苦勞も経験してきた層といえそうです。

なぜ彼ら、彼女らは文系（人文学系）の学問を学びたい、学び直したいと考えているのでしょうか。紙面では、「いま起きていることをより理解するために、歴史的背景をじっくり学びたい」（50代女性）、「最近では企業の要請ですぐに使える実学のようなものが優先されているようだが、人間の営みの根底にある文学などを学ぶことは意義あることだと考える」（60代男性）といった声が紹介されています。

社会の変化が激しく、先行きが不透明な現代では、できるだけ無駄をなすこと、すぐに役立つことが「よいこと」だという考えが広がっています。しかし年齢を重ね、それなりに経験を積んだ時点で振り返ったときに、そこには（それだけでは）「何かが欠けている…」と思う人は少なくないのかもしれない。

人文学部の諸分野は、多かれ少なかれ「人間の営みの根底にある」ものにねらいを定めています。学問を学ぶことが、その人の土台を形づくると同時に、視野を広げてものごとを俯瞰し、位置づけることにもつながる。それはけっして古びることなく、自分が迷い、悩んだときに立ち返る参照軸の役割も果たすのではないのでしょうか。

大学を取り巻く雰囲気としては、相変わらず文系はさほど重宝されず、予算面などでもひんやりした風が吹いている感じです。人文学部に勤務するわれわれとしても、

よりいっそう、自分たちの仕事を振り返って改善を図りつつ、社会に向けてもアピールしていくことが求められます。上記の新聞記事にある読者の回答や声は心強いものでしたが、現役の若い学生たちは現在の学びについてどう感じているのでしょうか。

人文学部の公式ホームページには、「人文学部学生プロジェクト」という団体の学生が企画・編集・執筆を担当しているコーナー（ブログ）があります。そこには、授業の魅力の紹介、学部教員へのインタビュー、海外留学中の学生による連載記事、卒業生の声などが掲載されています。たとえば「ゼミ訪問」と題されたシリーズでは、3・4年生が専門分野を深く学ぶ演習形式の少人数授業（ゼミ）の様子が紹介されています。そこには、ゼミの内容や教員の言葉とともに、受講生の学びに対する考えも記されています。

「抽象的な概念やドイツ語単語の解釈について徹底的に考える思考力が身に付いたことは将来にも活かせる」「言語って面白い」という感覚をもとに、新しいこと、特に様々な言語を学ぶ意欲を持ち続けたい」「人の話を深掘する傾聴力や、インタビュー結果を考察する分析力は将来に生きてくる」「今ある情報から些細なことでも疑問をもち、研究のテーマを見つけ出すという課題発見力や情報収集力・分析力は仕事でも役立てることができるかな」などなど。

一例をあげただけですが、いまの学生が何に関心をもち、現在の学びをどう捉えているのかをうかがい知ることができます。そこで得られるものは、すぐに古びてしまう情報や知識というよりも、これから長いスパンの中でさまざまな応用可能な、けっして古びることのない力なのだと思います（希望を込めてですが）。お時間のあるときにぜひホームページをご覧ください、いまの学生の様子も知っていただければ幸いです。



「人プロブログ」ゼミ紹介記事の写真より

認知心理学的クラウドファンディング顛末記

新美 亮輔

美川憲一がお金をちょうだいと歌い、チャック・ブラウンがWe need money!とシャウトしたように、いつの世も人はお金に苦労するもの。大学教員もまた研究資金調達に日々頭を悩ませています。国の財政のあれやこれやで公的研究費が増えない中、国立大学の研究費不足の問題についてお聞き及びの方も多いかも知れません。

クラウドファンディング (CF)、ご存知でしょうか。非営利団体がインターネット上のプラットフォームで広く寄附を募るしくみです。研究機関によるCFも多く、国立科学博物館が9億円以上を集めたことはニュースになりました。新潟大学も2022年からReadyforと提携してCFを行っており、私もそれは知っていたのですが、自分の研究って視覚認知とかの基礎研究で、何の役に立つのかわかりやすく寄附してもらえそうなやつじゃないから…まあ、関係ないかな…という印象でした。

そんな私が人文学部初のCFを行うことになったのは一体どういう因果かと申しますと、話はコロナに遡ります。実験室での心理学実験が難しくなり（実際には感染症対策を講じた上で可能になりましたが）、以前から疑問に思っていたことを非対面オンラインで実験してみようと思ひ立ちます。それは「クラスなどの数十人の集団の中にマイノリティが一人でも含まれる確率」を人々はどれくらいだと思っているのか？という疑問でした。授業での質疑応答や大学教員としての日常の経験から、性的少数者などの（見た目ではすぐにはわからない）マイノリティが身の周りにいる可能性を多くの人は過小評価しているのでは、と思っていたのです。確率判断やそれに基づく意思決定は認知心理学で研究されてきたテーマです。実際にオンライン実験をしてみると、思った以上に強い過小視が起こっていました（詳しくは、ぜひQRコードからCFプロジェクトページをご覧ください）。もし教員や管理職がこのような過小視をしていたら、クラスや職場の環境もよくなるかも知れません。

しかし、この現象を科学的根拠とともに世に知ってもらうには論文をオープンアクセス化（学術誌の購読者以外でも誰でも読めるようにすること）し、さらに実験を続ける必要がありますが、そこまでの資金はない。そこでCFのことを思ひ出したという次第。CFの実施自体が広報的な意味を持ち、この研究を知ってもらうきっかけになるだろうという目論見もありました。

学内の担当職員の方々の力を借りながら準備を進め、2024年2月にCF開始。CFにはいくつかの方法があるのですが、今回は期間内に目標額を達成できなければ不成立になる（寄附は返金される）方式です。わかってはいたものの、これがもう心臓に悪い。びくびくしながら達成率を薄目で確認する毎日。宣伝をせねばとプレスリリースを出し、チラシも作り、同僚・知人に拡散を依頼しまくり、同窓会にもメールを配信していただきました。しかし紙の学部だよりや同窓会報は届くのがCF終了後の4月とわかり、掲載断念。大学の広報誌「六花」も運悪くCF期間中に出る号がなく、不安と血圧が高まります。あわてて寄附に関する研究書を買って読んでみるものの、寄附を多く集める方法よりも、そもそも寄附とは何か、文化的な側面だけでなく心理学的な側面はどうなっているのか、向社会的行動・利他行動の一種と言えるそうだが…などと考え始めてしまい、これだから研究者ってやつは。それでも、経験豊富な職員の方々が多方面に営業してくださったこともあり、何とか期限の3日前に目標額を達成しCF成立！この時は、うれしいというよりも安堵感で脱力するばかりでした。おかげさまで論文は5月にオープンアクセスで出版、後に新聞報道も。新しい実験を開始でき、うれしいことに興味を持ったゼミ生が卒論研究としても取り組んでくれました（確率の理解を助ける手法の効果を調べました）。また、報道をきっかけに講演の依頼があり、マイノリティの認知について学校の先生方にお話しする機会にも恵まれました。

振り返りますと、研究内容の面でも、それ以外の面でも、社会とつながった研究活動というものを強く実感した、と思います。人文学部にはフィールドワークなどを通して地域社会と密接に関わる研究分野も多いですが、私のような基礎心理学の研究者には貴重な経験です。地元の複数の企業からご寄附いただいたことも、地方国立大学への期待と信頼を感じ、襟を正す思いでした。ご寄附や拡散のご協力をしてくださった皆様、本当にありがとうございました。ご寄附の通知が来るたびにモニターの前で叩頭三拝しておりました。

大学のCF、けっこう行われています。ぜひ検索してみてください。寄附金控除になるものも多いですよ。

（今回のCFの詳細はこちらから→）



奥会津発・地域デジタルアーカイブの挑戦

人文学部と只見川電源流域振興協議会の連携協定締結に寄せて

榎本 千賀子

2024年7月19日、新潟大学人文学部と福島県奥会津地域の柳津町・三島町・金山町・昭和村・只見町・南会津町・檜枝岐村の7町村により構成される只見川電源流域振興協議会が連携協定を締結しました。この協定は、地域活性化・教育・学術・文化などの分野において、人文学部と奥会津の7町村が相互に連携・協力し、地域社会への貢献と人材の育成に寄与することを目的としています。

人文学部は、所属教員が中心となって設立・運営に携わってきた「にいがた地域映像アーカイブ」において、金山町在住の故・角田勝之助氏が長年撮影されてきた写真・動画などの映像資料のデジタル化・整理・公開に取り組んだことをきっかけに、奥会津7町村のひとつである金山町と以前より連携協定を結んでいました。今回の只見川電源流域振興協議会との連携許定により人文学部は、この金山町との連携協定を、奥会津7町村へと広げ、一層強化することを目指しています。ここでは、本連携協定に寄せて、私が奥会津で構築中の地域デジタルアーカイブの試みについて、ご紹介したいと思います。

奥会津地域は、越後山脈を境に新潟県と接し、阿賀野川水系最大の支川である只見川が流れる、新潟と深い結びつきを持った地域です。私は、2013年に前述の金山町の角田氏の映像資料整理に参加したことをきっかけに、奥会津地域をフィールドとした地域デジタルアーカイブの実践と研究の取り組みを開始しました。そして、連携協定に先立つ2023年4月からは、奥会津7町村のエコミュージアム活動「奥会津ミュージアム」に参加し、奥会津デジタルアーカイブ準備室長として、奥会津地域のデジタルアーカイブ構築に携わっています。

日本有数の過疎・高齢化地域のひとつである奥会津地域では、地域の文化や記憶の継承が喫緊の課題となっています。私自身が直接関わった事例でも、金山町山入地区の伝統芸能「山入歌舞伎」が、人手不足を中心とした事情により、2018年を最後に上演できなくなることがありました。私は2017、18年の「山入歌舞伎」に役者として参加し、上演にかける人々の熱意と芝居への愛を目の当たりにしました。また、演者、観客の双方に混じった地域のこどもたちが、舞台に目を輝かせる様子にも感銘を受けました。このように地域に根付いた芸能が途絶することは、大きな損失というよりほかありません。

地域文化の保存・継承の危機に際しては、これまで、博物館や教育委員会等による対応が期待されてきました。しかし近年は、これら既存の仕組みもまた、厳しい状況に置かれています。2024年には、奈良県立民俗博物館が展示を一時休止するとともに、一部収蔵品の処分を検討していることが明らかとなり、全国に衝撃を与えました。県レベルの館においてさえ、これまで通りの資料の保存・継承活動が困難な状況が生じ始めているのです。そのような状況のなか、基礎自治体以下の小さな地域コミュニティのレベルでは、大きな話題になることも議論になる

こともなく、さらに多くの文化やその記録・資料が深刻な状況に追い込まれているのです。

奥会津デジタルアーカイブは、この課題に対し、7町村が協力して文化や記憶の継承の手がかりとなる様々な地域資料のデジタル化・保存・公開を行うことで、既存の仕組みを補完するとともに、デジタル技術を生かした新たな可能性を探ろうという試みです。2024年7月にテスト公開を開始したウェブサイト「奥会津デジタルアーカイブ Open OKURAIRI」では、考古・民俗資料を中心に、現在約1500点の地域資料データを公開しています。また、今後は民具や土器の3Dデータの追加公開など、さらなる公開資料の充実をはかるとともに、デジタル化の利点を活かした資料データの活用にも力を入れてゆく予定です。なお、サイトで公開している資料については、そのほぼ全てが今後自由に活用できるよう権利処理済みです。これは、本アーカイブが密かに自慢したいポイントです。

始まったばかりの奥会津デジタルアーカイブの試みには、まだまだ多くの課題も残されています。しかし、今回の人文学部と只見川電源流域振興協議会の連携協定締結を機に、大学における研究・教育活動とも連動しながら、同様の課題を抱える地域のモデルとなるような活動をさらに目指してまいりますので、ぜひ今後の活動にご期待いただきたいと思います。

にいがた地域映像アーカイブ

※学外からのデータベースのご利用には申請が必要です。



奥会津デジタルアーカイブ
Open OKURAIRI



奥会津デジタルアーカイブ Open OKURAIRI 資料閲覧画面より
画面掲載の民具は、金山町民、福島大学学生・新潟大学現代社会研究科院生が参加した民具整理ワークショップを通じてデジタルアーカイブ化されたものです。

NHKラジオ 『まいにちフランス語応用編』を担当して

逸見 龍生

この度、2024年10月から2025年3月まで、NHKラジオ『まいにちフランス語応用編』の講師を務めました。本番組は、毎週木・金曜日の15分間放送され、2025年4月から9月までは再放送が予定されております。

Art de la paroleを学ぶ」というタイトルで、17世紀古典期から18世紀啓蒙時代・革命期までのフランス語を、古典作品を通じて味わっていただく内容でお届けいたしました。

時代はほぼ日本の江戸時代に相当しますが、フランス語としては、日本の王朝期や江戸期の古典語のような、現代語と隔たりのある文章ではありません。フランス語は、文法や語法の基本形がはやくも17世紀には確立され、現代においても、この時代のことばや文章作法が規範とされています。ラ・ブリュイエールやモンテスキュー、ルソーの文章は、むしろ、明治期の夏目漱石や森鷗外の近代文学の作品に感じられるような、ある種の近さ、あるいは微妙な遠さといった距離感に近いかもしれません。

番組のためにおおよそ100回、40点から50点のテキストを選定いたしました。どの作品も熟読すれば、深い味わいと魅力を持つ文章ばかりです。ご一緒したネイティブ講師陣としましては、前半の17世紀を私の大学時代の恩師であるロラン・スレット先生に、後半は新潟大学でも教鞭をとられていたクロエ・ヴィアート先生にご担当いただきました。先生方の見事な朗読に、フランス語の響きの美しさを感じていただけます。

取り上げたテキストの多くは、新潟大学人文学部1年生向けのフランス語・フランス文化の授業で使用してきた教材が中心となっています。フランス古典は、時代を超えて読者の心に響く普遍的な魅力を持っています。今回のラジオ講座を通じて、フランス古典文学の中に継承された言葉の芸術、その素晴らしさを、多くの方々にお伝えできたとすれば、これ以上の喜びはありません。この貴重な機会をいただけたことに、心より感謝申し上げます。



第39回俳人協会評論新人賞受賞 『新潟医科大学の俳人教授たち』 (新潟日報メディアネット、2024)

中本 真人

このたび、拙著ブックレット新潟大学82『新潟医科大学の俳人教授たち』(新潟日報メディアネット、2024)が、第39回俳人協会評論新人賞を受賞しました。同賞は、公益社団法人俳人協会が優れた句集や評論集を顕彰する俳人協会四賞(俳人協会賞、俳人協会新人賞、俳人協会評論賞、俳人協会評論新人賞)のひとつです。2025年3月17日(月)には、今年度の授与式が東京都新宿区の京王プラザホテルにて開催されました。

本学の前身である新潟医科大学には、教授の中田みづほ(外科)、高野素十(法医学)、浜口今夜(内科)、及川仙石(衛生学)が俳人としても活躍していました。彼らは高浜虚子に師事して、俳句雑誌『ホトトギス』に俳句や文章を発表していました。

高野素十については、

ひつばれる糸まつすぐや甲虫
方丈の大庇より春の蝶

などの俳句がよく知られます。新潟医科大学では停年まで法医学教室教授を務め、戦後は学長にも選ばれました。

また中田みづほは、俳句雑誌『まはぎ』を通して長きにわたり新潟の俳句会を指導しただけでなく、特に脳外科の分野で大きな業績をあげました。そして浜口今夜と及川仙石は、素十・みづほの同僚として、またよき理解者として、その活躍を支えました。

近代俳句史最大の事件ともいわれる水原秋桜子の『ホトトギス』離脱は、『まはぎ』に掲載されたみづほと今夜の対談「句修業漫談」が原因であったといわれます。拙著では、この「句修業漫談」をめぐる経緯を丁寧に読み解くとともに、従来の見方を批判的に再検討しました。

本年は、中田みづほ没後50年に当たります。そのような年に、みづほについて書かれた拙著が俳人協会評論新人賞を受賞したことは、非常に意義深いと考えています。



◇人文学部に新しく来られた方々

■牧野 由佳



2024年10月に人文学部民俗学・博物館学分野の助教として着任しました牧野由佳と申します。民俗学の中でも民俗芸能研究を専門としていますが、芸能それ自体というよりも芸能を行う人や集団、地域社会における

芸能の位置づけに関心を寄せ研究に取り組んでいます。現在は梯子獅子舞という芸能が伝承される愛知県の一集落を対象に、当該地域での獅子舞の意義の変化などを中心に検討しています。

民俗芸能とも繋がりのある信仰分野にも興味を持っており、特に各地で細々と行なわれる講行事の調査を行っています。調査を契機として、さまざまな祭り行事や、富士講員の富士登拝にご一緒するなど得難い体験をしてきましたが、中でも木曾御嶽講の神や霊神を降ろす御座の見学や御嶽講員への聞き取り調査は印象的で、それらを通じて現代社会における講の役割を考えています。

このほか地域博物館での学芸員としての勤務経験から、地域所蔵の史資料の保存にも関心を持っています。地域での調査や住民との交流を通じて、博物館内だけではなく地域が主体となった資料保存の重要性を感じ、近年では住民とともに史資料の保存継承活動に模索しながら取り組んでいます。

4月からは民俗学実習のほか博物館学関係の科目を担当します。学芸員職に就かない受講生にも地域文化や文化財の保護活動の意義を十分に伝え、学生の皆さんがどのような進路に選んだとしても、それらに目を向け続けることができる人材を育成できるよう、微力ながら取り組んでまいりたいと考えています。

また、今後は新潟に関する新たな研究テーマを見つけ、推進することで、学生への教育や地域への還元ができるよう尽力したいと考えます。

着任から半年が経ち、新潟の寒さには慣れつつありますが、業務に関してはまだまだ至らない点が多々ありますので、今後とも皆様からのご指導ご鞭撻をいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

■林 歆



北京大学から来た林歆と申します。私は、新潟大学との強い絆を感じています。

私と新潟大学とのつながりは、2003年の4月から2004年の3月までの一年間、法学部准教授として中国語を教えたことに

遡ります。当時の学生さんは皆、真面目に勉強していて、私と中国語で真剣に交流していました。この経験を通して、私も日本の文化や日本人の生活について、深く理解できるようになりました。

また、当時法学部長であった國谷知史教授をはじめ、教職員の皆さんもとても親切で、大変お世話になりました。

その後4年間、私は新潟大学から離れていましたが、その間も新潟大学を懐かしく感じていました。

すると、2008年、2010年、2012年の2月の三度にわたって、国際センターと藤田益子准教授のはからいで、新潟大学国際センターのHSK講座講師を務めるという貴重な体験をすることができました。

また、それからさらに6年後の2018年の4月、私は拓殖大学八王子国際キャンパスで中国語を教え始めました。同年のクリスマス休暇中、二日間新潟に滞在しました。風は強いけれども晴れた午後、新潟大学のキャンパスを短い間散歩し、かつてと変わらず静かで美しい風景を楽しみました。その日の夜は、新潟に住む親友と夕食を共にしました。そして翌春には、横浜で國谷先生に再会することができました。

それからさらに5年が経ちました。その5年間は、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行した困難な時期でした。そして、感染症が落ち着いた2024年の10月に私は新潟大学に戻り、この馴染み深いキャンパスで働き始めたのです。

現在私は、中国語と中国文化に興味を持つ学生さん方に囲まれて、多くの幸せを感じています。また、学生さん方から日本の事情と日本の文化について多くを学んでいます。

この5ヶ月間、教職員の皆さんの配慮と助けにより、私は毎日楽しく暮らしています。

新潟大学の皆様、今後の7ヶ月間とも引き続きよろしく申し上げます。谢谢各位！

◇人文学部を去られる方々

■秋 孝道

1990年4月、新潟大学人文学部に着任。2025年3月限りで定年退職。理論言語学（生成文法理論）に基づいて、英語の文・句の構造に関する仕組み（統語論）や、英語の文・句の意味に関する仕組み（意味論）を解明する研究を行う。主要な研究業績は【編著書】『言語類型の記述的・理論的研究』（新潟大学人文学部、2012年）【共著】『チョムスキー理論辞典（増補版）』（研究社、2016年）、『言語学の現在を知る26考』（研究社、2016年）、『言語研究の現在』（開拓社、2008年）、『あなたの知らない英語の法則』ブックレット新潟大学7（新潟日報事業者、2002年）など。2024年度の主要な担当科目は「アカデミック英語入門R」、人文学部「英米言語文化演習」「英米言語概説B」、現代社会文化研究科「英米言語文化Ⅱ演習」「英米言語文化Ⅱ特論」「比較文法研究」など（文責 榎本千賀子）。

■青木 要祐



2021年8月から3年間、考古学の助教として勤務しました。実習科目やオムニバスの講義を担当したほか、入試やキャリア支援などの学内委員も務めました。初めてのことばかりだったこともあり、先生方や事務の方々に大変お世話になりました。着任時には博士課程を単位取得退学した状態でしたが、半年後には博士論文を無事提出することができたことも、ひとえに白石典之先生・森貴教先生をはじめとした人文学部の皆様のご配慮によるものです。厚く感謝申し上げます。

研究面では、着任以前もフィールドの一つとしていた県内を中心に、旧石器～縄文時代を中心とした石器の製作技術や石材についての研究を深めました。特に、佐渡をフィールドに加えられたことは大きなプラスとなりました。2022年に担当させていただいた佐渡学セミナー講演に向けた下調べを行うなかで、県外ではあまり知られていなかった佐渡の考古資料について把握し、早速、翌月応募締切であった科研費のテーマの一翼として取り上げたところ無事採択され、研究を進めることができました。この成果の一部は年度末刊行の『佐渡・越後文化交流史研究』第24号に投稿させていただきました。

また、最終年度であった今年度には、人文学部研究叢書として単著を刊行させていただきました。退職見込みだった私の申請を受け付け、採択してくださった研究推進委員会の先生方、研究叢書ご担当の青柳かおる先生に深く御礼申し上げます。

4月からは新潟大学大学院教育支援機構の特任専

門職員に就く見込みですが、科研費等の研究は学系フェローとして継続いたします。まだしばらくは新潟大学にいたることになりましたので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

■加賀谷 真梨



犬と猫のキャリー2段重ねに8カ月の子をベビーカーに乗せて上越新幹線に乗り込んでから早9年が経過しました。

私は文科省の博士1万人創出計画の時代に奨学金貸与を受

けながら博士号を取り、お祈りレターで焼き芋焼こうかと同世代の友人と慰めあいながらポスト10年を過ごしました。そんな私に専任のポストを与えてくださった飯島康夫先生をはじめとする旧社会・地域文化学と歴史の先生方には、感謝してもしきれない思いで過ごしてきました。着任後も知り合う先生方皆ユニークで優秀な方ばかりで、色々とやさしく私を温かく支えてくださり、同僚に恵まれた楽しい職場でした。また、教員のみならず職員の皆さんにも多くを助けて頂きました。子ども用品の「お譲り会」にお誘い頂いたことや、学務委員の任期中に学務係の皆さんと飲食を共にしたことも良い思い出です。守衛のKさんに手を振って出勤・退勤するというルーティンも楽しみの一つでした。また、新潟に来る前は「村落なんてもはや（沖縄以外）存在しない」と豪語していた私の認識を180度改めさせてくれた民俗学実習の調査地の皆さんからは、人間の営みの深淵さを学びました。

このまま本学に骨をうずめる覚悟もできていたのですが、昨今の人事削減の余波が私にはことさら重くのしかかり、また、研究に時間を割きたいという想いも強くなり、新しい職場に移ることにしました。民俗学って面白そう、民俗学を学びたくて新大に来たといった学生たちを置いていくことは、身を切られる思いです。民俗学研究室の学生・院生は打てば響く優秀な若者が多く、2年次からの実習で培った調査力を発揮して書く卒論は学会の卒論発表会でも群を抜いており、毎年とても誇らしく思っていました。学生からも多くを学び、とても充実した時間でした。こうして書いていると離れる理由がよくわからなくなりますが、次の職場は5年任期のため緊張感を持って業績を積み、その先に向かって歩んでいこうと思います。

帰りの新幹線はランドセルを背負った2人の子どもと乗り込みます。新潟で出会った全ての人に感謝を申し上げます。

■鈴木 正美



新潟大学に赴任したのは2004年10月のことでした。新潟に来てみるとそこはかつてソ連に行くための出発港でしたし、また赴任当時は新潟＝ハバロフスク間の定期航空便もありました。私の専門はロシア文化研究ですから、新潟というロシアに近い場所に暮らすことになったのは、運命としか思えません。

新潟大学人文学部では主に初修外国語(ロシア語)とロシア文化(文学・美術・音楽)の講義・演習を担当しました。映画や小冊子を制作する「表現プロジェクト演習」や教育学部で「多文化音楽論」も担当しました。現代ロシアの詩やジャズ、美術について研究をし、コロナ禍が始まるまでは毎年ロシアに研究調査に行きました。

新潟では実に多くの方々と出会い、また多くの方と共に仕事(共演)をしました。私はクラリネットとサクスを演奏します。セルゲイ・レートフ、ロマン・ストリャール、アレクセイ・ボリーソフ、アレクセイ・クルグロフなどロシアの音楽家たちとも共演しましたし、白石かずこ、三角みづ紀、鈴木良一、セルゲイ・ビリュコフ、ミハイル・スホーチンといった詩人たちの自作朗読とも共演しました。堀川久子、本間恵子のお二人の身体表現とも共演を重ねています。また、学生有志と共にチンドン屋「うちのdeチンドン」を結成し、水と土の芸術祭では何度も街中で演奏しました。かもめプロジェクトの演劇にも毎回音楽出演しました。大地の芸術祭にも参加しています。

研究者としては3冊の著書を出し、ほぼ毎年論文を書きましたから、真面目に仕事をしたことになると思います。その一方で音楽活動を精力的に行うことができたのも新潟という場があったからこそだと思います。

■田邊 恵子



10年以上も大学(院)生として大学という空間にいと、春からも図書館にこもって文献を読み、遅々として進まない論文を前に頭を抱える日々が続くだけだと、卒業という節目に特段の感慨を抱くことはほとんどなかった。独文科の学生だった学部の卒業式、大講堂で行われるセレモニーには、友人との約束があったので出席しなかった。修士課程の修了式の日には学会の研究合宿に参加していて、後日事務室に証書を取りに行った。さすがに博士学位を取ったときにはいそいそと袴まで予約して準備していた。アカデミック・ガウンを羽織って大講堂の壇上にのぼり、総長直々に証書をもらうというのが出身大学の伝統なのだ。しかしパンデミックで式は中止、証書は忘れた頃に宅急便で届いた。そういうわけで、専任教員としての初めての赴任先である人文学部を去る、しかも4年きっかりで去るというこの機会にはじめて「卒業」を実感している。

4年間を通じてドイツ語を専攻する学生はそう多くない。しかし、あえて難解な(ついでにコスパもタイパも良いとは言えない)ドイツ語をやり続けようという骨のある彼らと過ごした時間は本当に楽しかった。1年生でABCを学び、2年生で古典作品の翻訳に挑み、3年生で自分の研究テーマを探しはじめる。留学や検定試験に挑戦する学生もいる。4年生になると、卒業論文を通じて自分や作品と徹底的に向き合う。そうして学生は、自分自身のかげがえのない言葉や思想を獲得してゆく。このような一人一人のプロセスに、しかも最強の相棒であるアンニャ・ホップ先生とともに関わることができて本当に幸福だった。4年間、私を大学教員として育ててくれたあなたたちに、心より感謝を。

2024年度人文学部 主なトピックス

4月16日 高橋秀樹教授 平家琵琶継承活動がNSTで特集される	8月10日 日本心理学会「高校生のための心理学講座」に人文学部教員4名が登場
5月19日 新美亮輔准教授 クラウドファンディングを活用し論文「Probability of minority inclusion is underestimated」を公開	9月7日 小林恵准教授 日本心理学会「国際賞奨励賞」受賞
22日 2023年度社会調査実習報告書「サービス付き高齢者向け住宅における「地域居住」と「生の自律」」が「新潟日報」で紹介される	30日 逸見龍生教授が講師を務めるNHKラジオ・フランス語講座が放送開始
29日 白石典之教授「元朝秘史—チンギス・カンの一級史料」(中央公論新社)刊行	11月3日 「シンボジウム『平家物語』の芸能と佐渡—うたいもの・かたりもの世界—」開催(新穂トキのむら元気館)
29日 佐渡市教育委員会が人文学部を訪問	10日 第12回「歴史地震史料研究会」開催(オンライン)
30日 考古学研究室による長岡市赤坂遺跡の発掘調査成果が「新潟日報」で紹介される	23日 「にいがた地域映像アーカイブデータベース」の資料を活用した「これなんだ? わからない民具を囲む会 in 金山町」開催(福島県金山町自然教育村会館)
31日 横山仁史助教による翻訳書『実践ニューロカウンセリング—治療介入の実際に脳機能を結びつける—』(現代図書)刊行	新大ブックフェア2024にて伊藤嘉高准教授の研究&書籍を特集
7月6日 田邊恵子准教授 「第15回表象文化論学会奨励賞」受賞	12月8日 『朝日中高生新聞』で新美亮輔准教授の研究が紹介される
19日 新潟大学人文学部と只見川電源流域振興協議会が連携協定を締結	1月24日 2024年度卒業論文発表会開催開始
27日 第13回佐渡学セミナー開催(両津開発総合センター)	25日 中本真人准教授 「第39回俳人協会評論新人賞」受賞
第46回 新潟哲学思想セミナー(NiiPhis)「弁解機械と読むことのエチカ——告白をめぐるルソーとデリダ／ド・マンの問い」開催	3月1日 新潟大学人文社会科学系附置地域映像アーカイブ研究センター「人びとの姿からみる『にいがた』」展開催(新潟大学駅南キャンパスときめいと多目的スペース)